

創造の翼を広げて

秋の爽やかな一日。11月3日になると毎年この道を歩いていた。光輝く中に、残照の中に、桜紅の濃い色調。行く秋を揺らす穂。どこを見ても何を見ても、何とも鎮まりかえるこの街。三々五々語らいながら、笑みを浮かべながら映画を見に来られた方がいらしたのだと思うと、何とも言えない気持でいっぱいになった。

休む、ということは、一息入れる、ということ。コロナという時間があって、こうして再び皆で映画を楽しむ事ができる。夢のようである。今回届ける2本の映画。今の時代だからこそ、のことである。

人は一人では生きられない。精神的な孤独にも耐えられない。どこかで人と関わり互いに感じ合うことで、信頼が生まれ、生きがいも生まれる。生きるということは、繋がる、ということ。この信頼し合うという繋がりが、今、欠如している。戦いが平然と、起こる。耐えられぬほどの物を欲する人・国の人間。自己欲の塊である。これでは138億年の遠い昔、限りなく生まれた星々の一つ“地球”で、星のかけらでできている私たち生きものの、祈りの世界を喪失させることになる。このままでよいのか。

「太陽の王子ホルスの大冒険」を見た時、心に突き刺さる思いがした映像のことを覚えている。それはネズミの大群が凄い勢いで村を走り行く場面。画面を埋め、動くこのネズミは、何なのだ！この映画のアニメーターとして仕事をしていた山下さんの寄稿を読ませて頂き、映画を製作する、その譲れない信念があれほどエネルギーを放っているのだと、唸った。“譲れない！”

「大仏さまと子供たち」は、清水宏監督1952年の作品。監督は、自ら戦争孤児を引き取り育て、この映画にはその子らが出演しているという。戦後の奈良で孤児たちは繋がり生きる。そのありようが胸を打つ。大人が、見守る。大仏が、在る。

こうして私たちも繋がって映画を見る。一期一会の刻である。この映画会は映像教育という根底の上にある学びの一つだ。映画を見て育った子らが、成人して又映画に寄り添う。宇宙の遙かを思えば、私たちはこれから先を生きることになる。創造の翼を広げ合い、これからを生きる。500年、1000年先の地球を思い描きながら、、、。

小栗康平監督から「再会できて、よかったです」とメッセージが届いています。どうぞ、秋の一日をお楽しみください。

邑の映画会実行委員会会長 アーティスティック・ディレクター 加藤一枝

太陽の王子をめぐって

山の向こうにモーグと呼ばれる岩男が眠っている。モーグは数十年か数百年に一度目を覚ます。

村では毎日の暮らしに忙しい。魚が川を上ってくれば総出で冬支度の干物を作り、木の実が実れば取り入れる。

悪魔のグレンワルドは氷の城に住み、太陽を憎み、人々を滅ぼす。

淋しい岸辺に小舟が一艘、年老いた男が息子を残して死にかけている。「村を探せ。村が悪魔に襲われた時、私はお前を連れて逃げた。あの時…」少年ホルスは旅を続ける。ある時モーグの肩に刺さっていた棘を抜く。それは「太陽の剣」と呼ばれる鋸びた剣だった。

グレンワルドは妹ヒルダをホルスのもとに送り込み、一緒にある村にたどり着かせる。哀愁を帯びた美しいヒルダの琴を聞いた村人たちは心を奪われ、動かなくなり、お互いの心には諦めや不信感がうまれる。

55年前に作られた「太陽の王子ホルスの大冒険」は、東映動画の長編10作目に作られた。

総監督は大塚康生、作画総監督は森康二、演出は高畠勲など初めてずくしの取り組みは、最初から波乱含みでスタートした。大塚さんは当初駆け出しの演出助手の高畠勲さんを指名し、一歩も譲らなかつた。森康二さんは作画のトップで、大工原章さんと森康二さんが居なければアニメーションはなかつたと言われる程の人。

会社は予算とスケジュールを重視し、現場は作品内容で対抗した。労働組合も総力を上げて支えた。もちろん現在言われているように、彗星のように現れた宮崎駿さんの創作力は見逃せない。しかし、作品の根底には、石垣のように組み合わされた、それぞれの立場の人たちの「作ろうとする思い」が結晶となっている。

あまり評価されていないが、社長大川博の、東洋のディズニーを目指す夢。専務とか課長が予算を守らせるために、時にはスタッフを弾圧、処分しながら、「作りたい、作らせたい」と思う心が感じられた瞬間。

高畠さんが会社の力に抗しきれず作品の山場で、作画を「止める」という方法を考えだした時、画面いっぱいに走るネズミの大群を黙々と描き続け、会社側の作画1枚あたりのコスト能率での評価に立ち向かったスタッフ等、昨日のように思い出される。

みんなの力が合わされないと、と言うのは当時のスタッフの実感であり、労働組合の重要なテーマだった。

山下恭子（旧姓、中谷）

元、東映動画スタジオアニメーター

（主な作品「白蛇伝」「最遊記」「太陽の王子ホルスの大冒険」）

湯布院在住。ゆふいんこども映画祭実行委員

邑の映画会 vol.13 開催によせて

映画会再開おめでとうございます！

2020年からの時間は、大人たちにとって、自分の身を守ることだけではなく、どう子どもたちをコロナウイルスから守るか、ご高齢の方々、ご病気などの方々のお身体を守るか、そしてウィルスからだけではなく、そのために制限された生活の中でそれぞれの家族の精神と必要な経済のことも守っていく、大変な時間でした。そして子どもたちにとっての3年は大人たちが感じるよりもずっと長い。卒業式や入学式、修学旅行などの学校行事も、本来なら記念すべきだったり無邪気に楽しめたはずのものだったものひとつひとつが自粛されたりスタイルを変えたり我慢を強いられたりしてきたことと思います。

やっとですね。「おとなが見まることものまなざし」

これは邑の映画会が中野小学校の体育館で開かれていた頃、添えられていた言葉です。

「みんなで映画を見る 映画で会う」

そして今年は

「2本の映画を子どもと大人が一緒に見る」

この3つの言葉を胸に大切においてみると心がきゅつとなります。映画会の再開にむけては、実行委員会の皆様、開催にあたって力になってくださった皆々様。

慎重に進めてくださった経緯もふくめて今まで以上に大変なことだったと思います。

「おとなが見まることものまなざし」はもちろん今もずっとありますから、コロナ渦の中では子どもたちもずっと私たち大人の姿を見て乗り越えてくれたことも知っています。そう思うと、今年の「一緒に見る」という言葉がとてもいいとおしい。

邑の映画会にまた参加させていただけること、本当に嬉しいです。皆様、映画会で会いましょう。再会の喜びと、映画からのあたらしい出会いが会場に訪れたすべての方に届きますように。感謝をこめて。

邑の映画会 サポーター 降旗りの

サポーター募集中！！

一緒に邑の映画会を盛り上げてくれる仲間を募っています！

よかったです、facebookページからご連絡下さい！！

邑の映画会
facebookページが
出来ました！

